

イギリスにおける資本家的借地農業者の起源

著者	田代 正一
雑誌名	鹿児島大学農学部學術報告=Bulletin of the Faculty of Agriculture, Kagoshima University
巻	60
ページ	35-42
別言語のタイトル	The Origins of Capitalist Farmers in England
URL	http://hdl.handle.net/10232/00004432

イギリスにおける資本家的借地農業者の起源

田代正一[†]

(農業経済学研究室)

平成21年8月10日 受理

要 約

近代イギリス農業は大土地所有者、資本家的借地農業者、農業労働者の「3分割制」にもとづく資本制農業として発展してきた。このような農業発展は世界史的にもユニークなものである。本稿の課題は、イギリスにおける資本家的借地農業者の起源を明らかにすることである。中世イギリスでは、種々の収入や利得の機会に対する一定の支払いはfermと呼ばれた。14世紀には、領主直営地の全部または一部が「土地および家畜・農具貸付」(land and stock leases)としてベーリフ(bailiff)に貸し出された。その後、15、16世紀になると、farmerという言葉は領主直営地を賃借する者を意味するようになった。イギリスにおける借地農業者の最初の形態は領主の土地管理人であったベーリフである。

キーワード：資本家、借地農業者、領主直営地、ベーリフ

1. はじめに

イギリスの経済史家ウィリアム・アシュリー(William J. Ashley)は、名著『イギリス経済史講義』(1914年)の冒頭で「これまでのイギリスの農業上の発展が西欧においてはユニークなものであった」¹⁾と述べている。アシュリーは、近代イギリス農業の特異性を示すものとして「通例三つの階級——すなわち地主、借地農業者及び農業労働者——が土地の耕作に関係をもち、且つそれによって所得を得ようとしている事実」²⁾をあげ、「大陸のいずれの地方においても、イギリスにみられるように、同一の土地においてこれらの三階級がそれぞれ生産の仕事に関与しているのを見出すことはほとんどできない」³⁾と指摘している。

またイギリスの農業史家オーウィン(C. S. Orwin)も、その著書『イギリス農業発達史』(1949

年)の中で「今日のイギリス農業は・・・世界の他のいかなる国の農業とも異なった食糧生産の組織を示している。イギリス農業は、一人単位或いは家族単位の生産から資本家的生産方式への進化において、イギリスの他の産業と同じ道をたどった」⁴⁾と記している。

このように近代イギリス農業は「利害関係者の3分割制」⁵⁾にもとづく資本制農業として発展し、その存在は世界史的にもユニークなものとされている。すなわち、国土の大半を所有する比較的少数の地主、利潤のために農業を営む資本家的借地農業者、賃金を得るために労働力を売る農業労働者、これら3者の人格的分離にもとづく資本制農業の成立は近代イギリスを特徴づけるものである。

私は前稿において、イギリス農業における土地所有の問題を取り上げ、その近代化と地主制の形成に関する古典的学説を検討した⁶⁾。そこではイギリス

[†]：連絡責任者：田代正一(農業経済学研究室)

Tel: 099-285-8619, E-mail: tashiro@agri.kagoshima-u.ac.jp

¹⁾ アシュリー[1] p.2

²⁾ 同上 p.4

³⁾ 同上 p.5

⁴⁾ オーウィン[5] p.111

⁵⁾ アシュリー[1] p.3~4

⁶⁾ 田代[9] pp. 95~101

における大土地所有形成の歴史的輪郭を明らかにするとともに、近代イギリス農業における地主・借地農関係の特質についても若干の考察を行った。しかしながら同稿では、地主・借地農関係の一方の当事者である借地農業者については十分な考察ができなかった。

そこで本稿の課題は、そもそもイギリスの借地農業者はいついかにして生まれたのか、近代的な意味での地主・借地農関係の起源は一体どこに求められるのか、を明らかにすることである。この問題に接近しようとするとき、私が最初に思い浮かべるのは、マルクス『資本論』の「いわゆる本源的蓄積」⁷⁾と題された章である。本稿で私はマルクスの叙述を主な手がかりにしながら、この問題について若干の考察を行ってみたい。

2. 領主の土地管理人ベーリフ

マルクスは『資本論』第1巻第24章の「いわゆる本源的蓄積」の中ほどに「資本家的借地農業者の生成」⁸⁾と題する一節を設け、そこで「もともと資本家はどこから出てきたのか？」⁹⁾と問いかけている。マルクスの疑問は次のような文脈のもとで発せられたものである。すなわち、資本・賃労働関係の成立は生産手段の所有者と無産の労働者との人格的な分離を前提する。したがって資本関係の創造にはいわゆる本源的蓄積として「生産手段と生産者との歴史的分離過程」¹⁰⁾が必要である。そのような歴史的過程の基礎として「農村住民からの土地の収奪」¹¹⁾があり、かの有名なエンクロージャー運動もその一つの方法であった。けれども「農民の収奪は、直接にはただ大きな土地所有者をつくり出すだけ」¹²⁾であり、農業資本家を生み出すわけではない。

例えば18世紀の議会エンクロージャーは共有地の私有化によって、一方で大土地所有者をつくり出し他方で農民を無産の労働者に変えた。しかし、それは両者を直接に資本・賃労働関係として結びつけ

るものではなかった。土地を失った無産の労働者のある者は都市へと流出し、他の者は農村に残った。そして後者のある者は借地農業者に賃金労働者として雇用された。ところで、この借地農業者は議会エンクロージャーの結果初めて生まれたものではない。彼らはすでにそれ以前から存在していたのである。それでは彼らは一体どこから出てきたのか？

マルクスによると、借地農業者の生成の歴史は「幾世紀にもわたる緩慢な過程」¹³⁾であり、その起源は14世紀頃までさかのぼる。すなわち、「イギリスでは、借地農業者の最初の形態は、自分自身も農奴だったベーリフ（領主の土地管理人）である。彼の地位は古代ローマのヴィリクスの地位と似ており、ただ勢力範囲がこれよりも狭いだけである。14世紀の後半には、ベーリフは、地主から種子や家畜や農具を供給される借地農業者と置き替えられる。この借地農業者の状態は農民の状態とあまり変わらない。ただ彼のほうがより多くの賃労働を搾取するだけである。彼はまもなくメテイエ、すなわち半借地農業者になる。彼は農業資本の一部分を提供し、地主が他の部分を提供する。両者は、契約で定めた割合で総生産物を分け合う。この形態はイギリスでは急速になくなって、本来の借地農業者の形態に席を譲る。本来の借地農業者というのは、彼自身の資本を賃金労働者の使用によって増殖し、剰余生産物の一部分を貨幣か現物かで地主に地代として支払うものである。」¹⁴⁾

それ自身農奴だったといわれるベーリフについて『資本論』には次のような記述もある。「イギリスでは農奴制は14世紀の終わりごろには事実上なくなっていた。当時は、そして15世紀にはさらにいっそう、人口の非常な多数が自由な自営農民から成っていた。たとえ彼らの所有権がどんなに封建的な看板によって隠されていたとしても、いくらか大きな領主所有地では、以前はそれ自身農奴だった土地管理人(bailiff)は自由な借地農業者によって駆逐されていた。」¹⁵⁾

⁷⁾ マルクス[2] pp.932～996

⁸⁾ 同上 pp.969～972

⁹⁾ 同上 p.969

¹⁰⁾ 同上 p.934

¹¹⁾ 同上 p.936～959

¹²⁾ 同上 p.969

¹³⁾ 同上 p.969

¹⁴⁾ 同上 p.970

¹⁵⁾ 同上 p.936

このように、イギリスでは借地農業者の最初の形態は領主の土地管理人であるベーリフである。それが14世紀の後半に地主から生産手段を供給される借地農業者となり、さらに分益小作農を経て本来の借地農業者へと発展する。こうしてベーリフは15世紀には自由な借地農業者によって置き換えられる。マルクスはこのように述べている。

また『資本論』には次のような記述もある。1066年の「ノルマン人による征服の後にはイギリスの土地は巨大なバロン領に分割されていてそのうちにはただ一つで900の旧アングロサクソン貴族領を包括するものもしばしばあったとはいえ、その土地には一面に小農経営がばらまかれていて、ただあちこちにいくらか大きい領主直属地が点在していただけだったのである。」¹⁶⁾

このように中世イギリスでは、土地はバロン領すなわちマナー (manor) に分割され、そこには農民保有地と領主直営地とがあった。この領主直営地の管理人がベーリフなのである。イギリスに限らず中世ヨーロッパはいわゆる封建社会であり、「ここではだれもが従属しているのがみられる——農奴と領主、臣下と君主、俗人と聖職者」¹⁷⁾はそれぞれ土地を媒介として、支配・従属の人的関係を結んでいた。例えば、農奴と領主の間には、農奴である「直接生産者が一週間の一部分では事実上あるいは法律上自分のものである労働用具（犁や家畜など）を用いて、事実上自分のものである土地を耕作し、一週間の残りの日には領主のために無償で労働する」¹⁸⁾という関係があった。このような農奴制のもとでは、領主直営地の耕作は領主の代理人であるベーリフの監督のもとで農奴の労働によって行われた。これがいわゆる「労働地代」あるいは「賦役」と呼ばれるものである。

イギリスの法制史家フレデリック・ポロック (Frederic Pollock) によると、「封建制は13世紀前半のイングランドにおいて最も完全な段階に達した。13世紀後半以降、イングランドの封建制は、一連の

重大な修正を蒙った」¹⁹⁾。同様のことはイギリスの農奴制についても当てはまる。13世紀に典型的にみられたイギリスの農奴制は、その後、賦役の金納化とそれに伴う領主直営地の分割ないし貸付けによって解体へと向かう。マルクスは14世紀末にそれは事実上消滅していたとみており、さらに15世紀になると、農奴にかわって自由な自営農民が支配的となる一方、以前はベーリフによって管理されていた領主直営地も自由な借地農業者によって経営されるようになったと述べている。イギリスにおける借地農業者の生成の歴史をマルクスは以上のように理解している。

3. farmerという言葉の意味

アシュリーは前掲書の「近代的農業経営の端緒・マナーの崩壊」²⁰⁾と題する章の中で「今日われわれがイギリス農業発展史上のこの段階について有する知識は、サロルド・ロジャースのおかげで得られたものである。今日われわれは、＜農業経営資本＞のことを何げなく語っているが、それを歴史的に解明しなければならぬと考えたのは彼であった」²¹⁾と書いている。サロルド・ロジャース (Thorold Rogers) のおかげで得られた農業経営資本の歴史に関する知識とは何か。

アシュリーによれば、「近代の借地農業家の歴史上の源流の主要なものの一つが、14, 15, 16世紀において直営地を借地していた借地農業者の中に見出される」²²⁾というのである。それは「14世紀の後半においてはまだ散見する程度に過ぎなかったが、15世紀に至ると頻繁にみられるに至った現象であって、つまり、マナー領主が自己の直営地を農民の労役や地代をも含めたところの・直営地と結びつく権利や附帯利得と一所に、短期に、貸付けるようになってきた」²³⁾のである。

ところで「中世においては、種々の収入や利得の代わりに行われる一定の支払いはferm (ラテン語で

¹⁶⁾ 同上 p.937

¹⁷⁾ 同上 p.103

¹⁸⁾ マルクス[3] pp.1012~1013

¹⁹⁾ ポロック[6] p.55

²⁰⁾ アシュリー[1] pp.54~84

²¹⁾ 同上 p.68

²²⁾ 同上 p.66

²³⁾ 同上 p.66 “it becoming the practice of manorial lords to let their demesnes for short term of years, together with the rights and perquisites connected there with, including the peasants’ services or rents” (Longmans edition, p.53)

はfirma)と呼ばれており、また従って、一定年月の間直営地を賃借するものはfirmer, fermer或いはfarmerと呼ばれていた。このようにして、15, 16世紀に至ると、farmerという言葉は農業上の意味で用いられる場合には、最も普通には、直営地の全部または一部を賃借するものを意味するに至った²⁴⁾のである。そして「この言葉が、自己の計算で農地を管理経営するすべての人を含むように拡大されて用いられるようになったのは、はるか後代のことである。」²⁵⁾と記している。

とすれば、14世紀後半以降に出現してくるfarmerすなわち直営地の賃借者とは、いかなる人間であったのか。アシュリーによると、それは「しばしばみずからマナアの荘司(ベリフ)あるいは荘役(リーブ)として働いていた人間であった」²⁶⁾。なぜなら、彼らは「その土地の居住者であって、みずから利得を得ようと熱望し、しかもその生産能力について詳しい知識を有するもの」²⁷⁾だったからである。とはいえ、広大な直営地を一括して賃借し経営するには、それなりの労働用具が必要である。したがって「最初は、直営地にあった領主の家畜・農具が、土地そのもの及びその附属物件とともに貸付けられる」²⁸⁾ことになった。イギリスにおける資本家的借地農業者の起源について、アシュリーはこのように述べている。

マルクスが「イギリスでは、借地農業者の最初の形態は、自分自身も農奴だったベリフである」というとき、彼はその論拠を明示していない。したがって、マルクスがどのような文献に依拠してそのように述べたのかは明らかではない。しかし、マルクスの理解とアシュリーがロジャーズに依拠して述べていることは、内容が非常に類似している。

マルクスは『資本論』のある場所で次のように述べている。「ジェームズ・E. T. ロジャーズ(オックスフォード大学経済学教授)『イギリスにおける農業と物価の歴史』、オックスフォード、1866年、第

1巻、690ページ。この力作は、今日までに刊行された最初の2巻にはまだ1259-1400年の時代しか含んでいない。第2巻は統計材料だけを含んでいる。それは、この時代に関してわれわれがもっている最初の信頼できる<物価の歴史>である」²⁹⁾と。さらにまた、「ロジャーズ氏は、当時はプロテスタント正統派の本山オックスフォード大学の経済学教授だったにもかかわらず、彼の『農業の歴史』の序文のなかで宗教改革による民衆の貧民化を強調している」³⁰⁾と好意的な引用を行っている。このことから、「借地農業者の最初の形態はベリフである」というマルクスの理解は、ロジャーズに依拠したものである可能性が高い。

一方、アシュリーの著書にもロジャーズに関する次のような記述がある。「中世のイギリスの生活に関する詳細な知識は、サロルド・ロジャーズが荘司(ベリフ)の勘定帳account rollsやそれに類する文書を利用して研究したことによって、はじめて豊富なものとなるに至った。それらは、彼の『イギリスにおける農業と物価の歴史』全7巻、1866-1902年……の中に紹介されている。また、それらはおそらく、この問題をはじめて学究的な方法で世に示したところの、最も優れた研究である。」³¹⁾と。

このようにマルクスやアシュリーによって評価されたロジャーズであるが、その学説は後の研究によって修正を余儀なくされている。例えば矢口孝次郎は、すでに60年前(昭和24年)に次のように指摘している。すなわち、「金納化の問題のみについて観ても、古くロジャーズの研究があり、更にそれを批判したページの統計的研究、及びグレイの更に進んだ体系的研究等があるが、これらの一連の解釈の展開を批判して新たな資料と方法とに立脚して問題解釈に新たな方向を与えたものが……コスミンスキー及びポスタンの論文である」³²⁾と。そしてコスミンスキーやポスタンの研究も今ではすでに古典の範疇に属する。今日、この問題に関する研究蓄積は夥し

²⁴⁾ 同上 p.66 “A fixed payment in lieu of varying receipts or profits was known in the Middle Ages as a ‘ferm’ (Latin: firma)” (ibid. p.54)

²⁵⁾ アシュリー[1] p.66

²⁶⁾ 同上 p.67

²⁷⁾ 同上 p.67

²⁸⁾ 同上 p.67~68 “at first the lord’s stock on the demesne should be let with the land itself and the other appurtenances”(ibid. p.55)

²⁹⁾ マルクス[2] p.879

³⁰⁾ 同上 p.944

³¹⁾ アシュリー[1] (附録) p.5

³²⁾ 矢口[10] pp.262~263

いものがあり、その中で有力な学説がどの辺りにあるのかを見極めることさえ容易ではない。それ故、ここではそのような議論に深入りすることはしない。

ただ、私がここで強調しておきたいのは、マルクスは何故に借地農業者の生成の歴史を14世紀のペーリフにまでさかのぼったのかという点である。周知のように、今日では資本家的借地農業者の生成について語る際に「農民層の両極分解」という便利な用語が用いられる。しかし、これはマルクスの時代にはなかった言葉である。私の知る限り「農民層分解」という用語は『資本論』には登場しない。そのためマルクスは「もともと資本家はどこから出てきたのか？」と問いかけ、その答えを求めて歴史をさかのぼり、14世紀のペーリフにたどり着いたわけである。

4. いわゆる本源的蓄積の秘密

マルクスの『資本論』はそれ以前の経済学に対する批判の集大成として書かれたものである。スミス、リカード、マルサスらのいわゆる古典派経済学では「はじめから正義と労働とが唯一の致富手段だった」³³⁾と考えられているが、マルクスはこのような考え方を厳しく批判する。例えば「労働はすべての富とすべての文化の源泉である」というドイツ労働者党綱領の一節を読んで、マルクスは「かかるブルジョア的言い方・・・をゆるすわけにはゆかない」³⁴⁾と述べている。マルクスに言わせると「労働は・・・富の、ただ一つの源泉なのではない。ウィリアム・ベティの言うように、労働は素材的富の父であり、土地はその母である」³⁵⁾。ここでの「土地」とは、大自然の様々な力や要素を代表するものとしての土地である。そのことを正しく認識しておくべきである。

さらに、古典派経済学の父アダム・スミスの世界では、労働は休息や自由や幸福を犠牲にする行為である。そのような犠牲を惜しまぬ労働によって富は蓄積される。過去において払われた努力が現在の富を实らせたのであると考える。このような古典派経

済学の成功物語の中に隠されている「本源的蓄積の秘密」³⁶⁾をマルクスは『資本論』第1巻第24章で暴こうとしたのである。

「本源的蓄積が経済学で演ずる役割は、原罪が神学で演ずる役割とだいたい同じようなものである。アダムがりんごをかじって、そこで人類の上に罪が落ちた。この罪の起源は、それが過去の物語として語られることによって説明される。ずっと昔のあるときに、一方には勤勉で賢くてわけても儉約なえり抜きの人があり、他方にはなまけ者で、あらゆる持ち物を、またそれ以上を使い果たしてしまうくずどもがあった。とにかく、神学上の原罪の伝説は、われわれに、どうして人間が額に汗して食うように定められたかを語ってくれるのであるが、経済学上の原罪の物語は、どうして少しもそんなことをする必要のない人々がいるのかを明かしてくれるのである。それはともかくとして、前の話にもどれば、一方の人々は富を蓄積し、あとのほうの人々は結局自分自身の皮のほかにはなにも売れるものをもっていないことになったのである。そして、この原罪が犯されてからは、どんなに労働しても相変わらず自分自身よりほかになにも売れるものをもっていない大衆の貧窮と、わずかばかりの人々の富とが始まったのであって、これらの人々はずっと前から労働しなくなっているのに、その富は引き続き増大してゆくのである。」³⁷⁾

このような経済学上の原罪の物語をマルクスは「愚にもつかない子供だまし」³⁸⁾だと批判する。現実の歴史では「征服や圧制や強盗殺人が、要するに暴力が、大きな役割を演じている」³⁹⁾からである。自分自身以外に何も売れるものをもっていない大衆の出現をマルクスは暴力によるものとして強調している。

すなわち、「封建家臣団の解体や断続的な暴力的な土地取奪によって追い払われた人々、このような無保護なプロレタリアートは、それが生み出されたのと同じ速さでは、新たに起きてくるマニユファクチュアによって吸収されることができなかった。他方、自分たちの歩き慣れた生活の軌道から突然投げ

³³⁾ マルクス[2] p.933

³⁴⁾ マルクス[4] p.25~26

³⁵⁾ マルクス[2] p.58

³⁶⁾ マルクス[2] p.932

³⁷⁾ 同上 p.932~933

³⁸⁾ 同上 p.933

³⁹⁾ 同上 p.933

出された人々も、にわかには新しい状態の規律に慣れることはできなかつた。彼らは群をなして乞食になり、盗賊になり、浮浪人になった。それは、一部は性向からであったが、たいていは事情の強制によるものだった。⁴⁰⁾

無産のプロレタリアートたちは、なまけものでおろかできごとく蕩尽したからではなく、事情の強制によって貧窮したのである。このような事情の強制は「経済的諸関係の無言の強制」⁴¹⁾というよりも「経済外的な直接的な強力」⁴²⁾によるものであった。彼らは優勝劣敗をもたらす経済法則、あるいは自由な生産力競争の結果ではなく、あくまでも暴力的に生み出されたのだとマルクスは強調する。

それでは、他方の勤勉で賢くてわけても儉約なえり抜きの人は、いかにして富を蓄積できたのか。マルクスによると、「産業の騎士たちが剣の騎士たちを駆逐するということは、ただ自分たちのまったくあずかり知らない諸事件を利用することによってのみ成就された。彼らは、かつてローマの被解放民が自分の保護主の主人になるために用いたのと同じ卑劣な手段によって、成り上がったのである。」⁴³⁾すなわち、「債務を負った奴隷所有者や封建領主がますます多く吸い取るのは、彼自身がますます多く吸い取られるからである。あるいは、彼はついに高利貸に席を譲ってしまい、高利貸自身が土地所有者や奴隷所有者になるのであって、ちょうど古代ローマの騎士がそれである。昔の搾取者が行なう搾取は多かれ少なかれ家長的だった、というのはそれがだいたいにおいて政治的権力手段だったからであるが、この搾取者に代わって、冷酷な、金銭をむさぼる成り上がり者が現われるのである。」⁴⁴⁾

5. 結びにかえて

さきに述べたように、領主直営地の借地農業者はしばしばマナーのベリフ（荘司）やリーブ（荘役）として働いていた人間であった。ところが、「その

ような企業心に富んだ荘役の中にはすでにかなり富裕な地位にある者もあった。例えばチョーサーの描いている一人の荘役は、その領主よりも優れた商売人であって、若干の資本を手早く寄せ集め（彼は既にかんりの富をひそかに蓄えていた）、本来は領主のものであるべき金を領主に貸付けて、領主から感謝される術をも心得ていた」⁴⁵⁾とアシユリーは興味深い指摘をおこなっている。本来は領主のものであるべき金を領主に貸付けていた荘役がいたとするなら、彼はりっぱな「成り上がり者」であり資本家である。

ところが、わが国ではこれとは大きく異なる理解が学界の主流となっている。例えば、近代イギリス農業史研究の権威、椎名重明名誉教授は「直営地を一括借地する大きな借地農の存在は特筆すべきものではあるが、当初においては彼らのほとんどはもともとベリフbailiffなどのマナー役人であり、しかも土地とともに家畜とかスキ、種子などを領主から借り、生産物あるいはその価格の半分を地代として給付するのが普通であって、資本家的借地農ではなく、むしろ総借地人general farmerと呼ばれるべきものであった」⁴⁶⁾と述べておられる。これは、椎名教授が「資本家的経営」を次のように理解されているからである。すなわち、いわゆる第1次エンクロージャーに伴う牧羊経営は資本家的経営ではなかった。従って、「領主あるいは領主の差配とか借地人による牧羊大経営が資本家的経営に転化し、資本制農業としての性格をもつようになるためには、農民層の分解、したがって富農層の経営的上昇＝生産者としての蓄積を媒介とせざるをえなかつた」⁴⁷⁾のであり、「16世紀後半からますます盛んになる農民的エンクロージャ＝富農層の経営的上昇、つまり小資本家的農業経営の発展が、農民を追放したあとの牧羊大経営を資本家的経営にかえていったのであった」⁴⁸⁾と理解されている。改めて言えば、「国内羊毛工業の展開とそれに対する領主的対応＝牧羊エンクロウジャーとを前提としてあらわれた、国内経済の新たな

⁴⁰⁾ 同上 p.959

⁴¹⁾ 同上 p.963

⁴²⁾ 同上 p.963

⁴³⁾ 同上 p.935

⁴⁴⁾ マルクス[3] p.770

⁴⁵⁾ アシユリー[1] p.67

⁴⁶⁾ 椎名[7] p.94

⁴⁷⁾ 同上 p.96

⁴⁸⁾ 同上 p.96

な発展に対する農民的対応＝農民的・小ブルジョアのエンクロージャーこそ、イギリス農業資本家の——したがってまた上述の牧羊大経営が資本家的経営に転化する——基点であったといわなければならない^[49]と椎名教授は強調される。教授は何故そのように主張されるのか、ここで深く立ち入る余裕はないので別の機会に論じてみたい。ただひとつ付言するならば、「富農層の経営的上昇＝生産者としての蓄積」という言葉は、どことなく例の「勤勉で賢くてわけても儉約なえり抜きの人」が富を蓄積したのだという成功物語を想起させることである。

話を元にもどすと、マルクスにとって確かなことは、パーリフが最初の借地農業者であり、もし彼が労働者を搾取しているならば、彼は紛れもなく資本家的借地農業者である。また領主の牧羊大経営が賃金労働者を雇用しているならば、彼もまた資本家である。マルクスは『資本論』の「いわゆる本源的蓄積」論の文脈において、「資本家的借地農業者の生成」を問題にし、その歴史を「手探り」した結果、借地農業者のもともとの形態がパーリフであることを突き止めた。それはあるいはリープであったかもしれない。「大体において各マナアには一人の荘宰 bailiff がいたが、彼はそのマナアの農事の実行に関し直接指導監督権を有しており、従って農民と最も接触の多い地位にある役人であった。最後に荘役 reeve と称する農民（賦役農）の代表があったが、彼は、時には荘宰とともにマナアの収支の管理をなし、直営地の耕作を監督し、領主の建物農具を保管する外、百般のことに亘って関係を有していた^[50]」ので、領主直営地の貸出しがなされる場合、パーリフやリープが借地農業者になることは、大いにありうることである。しかもそれは、当初はロジャーズという「土地及び家畜・農具貸付」^[51] land and stock

leases として行われた。この場合の stock には live stock（家畜）と dead stock（農具）の両方が含まれていたのである。

現在、定期賃貸借を意味する lease という言葉は、イギリスではすでに13世紀に使われており、「1348年の黒死病 black death 以降続いたはなはだしい人口減少は、非常な労働力不足をひき起し、農場の経営を利益なきものとし、その頃まで主として修道院 religious house がその土地を経営する際の便利な手段として用いていた定期賃貸借 leases が至るところで一般化した」^[52]という。イギリス借地農業者の起源はこのようリープ lease 契約の一方の当事者であるパーリフ（またはリープ）に見出すことができる。

引用文献

- [1] アシュリー, W. J.: イギリス経済史講義. 矢口孝次郎訳, 有斐閣 (1958)
- [2] マルクス, K.: 資本論. 第1巻, 岡崎次郎訳, 大月書店 (1968)
- [3] マルクス, K.: 資本論. 第3巻, 岡崎次郎訳, 大月書店 (1968)
- [4] マルクス, K.: ゴータ綱領批判. 望月清司訳, 岩波文庫 (1975)
- [5] オーウィン, C. S.: イギリス農業発達史. 三澤嶽郎訳, 御茶の水書房 (1978)
- [6] ポロック, F.: イギリス土地法. 平松紘監訳, 日本評論社 (1980)
- [7] 椎名重明: イギリス農業の発展. 農政調査委員会編, 体系農業百科事典VI, 農政調査委員会 (1967)
- [8] 椎名重明: 近代的土地所有. 東京大学出版会 (1972)
- [9] 田代正一: イギリスにおける土地所有の近代化と地主制の形成. 鹿児島大学農学部学術報告, 57, pp. 37-47 (2007)
- [10] 矢口孝次郎: イギリス封建社会経済史. 日本評論社 (1949)

^[49] 椎名[8] p.42

^[50] 矢口[10] p.265

^[51] アシュリー[1] p.68

^[52] ポロック[6] p.72

The Origins of Capitalist Farmers in England

Shōichi TASHIRO[†]

(Laboratory of Agricultural Economics)

Summary

In modern England, capitalist farming has developed under the three-fold division of agricultural interests: landlords, capitalist farmers and laborers. The development of English farming is unique in modern world history. The purpose of this paper is to examine the origins of capitalist farmers in England. In the Middle Ages a fixed payment in lieu of varying receipts or profits was known as a “ferm”. In the 14th century some bailiffs took lords’ demesne on “land and stock lease”. The term “farmer” meant a person who had taken on lease a demesne in the 15th or 16th century. We can find the historical origin of capitalist farmers in the bailiffs who were agents of the landlords.

Key words: capitalist, farmer, demesne, bailiff

[†]: Correspondence to: Shōichi TASHIRO (Laboratory of Agricultural Economics)

Tel: 099-285-8619, E-mail: tashiro@agri.kagoshima-u.ac.jp